
それはある朝突然に

偽野海月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それはある朝突然に

【Nコード】

N6151I

【作者名】

偽野海月

【あらすじ】

それはある朝突然に。

ちよつとコミカルでホラーな二人の出会い。

ホラーでコメディなのに笑えない。

笑えたのなら・・・きつとあなたも。

1 (前書き)

主人公その1。

女 19歳 大学生

1

《一人が倒れた。続くようにもう一人。

もがくように苦しんで、呼吸を止めた。

まりだった。

それが始

はじまり。》

終わりの、

●●●Side.●●●

やばいやばいやばい。寝過ぎちゃったよ！

今日は必修の講義が朝一からあるのに！！

珍しく静かな朝だったからつい2度寝しちゃったのが間違いだった・・・適当に服を引っ掛けながら階段を転がり降りてリビングに飛び込む。

「あれ？お母さん？」

いつもなら夫婦そろってリビングにいるはずなのに、今朝はどちらも見当たらない。

だから静かだったのか・・・と納得しつつも今はそれどころじゃない！

「ヤバい！あと15分しかない！！」

ご飯は身体の・・・ひいては生きることの基本だ。抜かすことなんてありえない。

生きるためには食べなきゃいけない。

でも今は講義に遅れそう。

講義に遅れて留年なんかしちゃったら！！

生きるためにはご飯が必要で

ご飯を食べるためにはお金が必要で

お金を手に入れるためには仕事が必要で
いい仕事に就くためには学歴が必要なのだ

生きるためにはやっぱり一食ぐらいの妥協が必要なのだろうか？
否！健康に学ぶためには身体が資本！！

「あー！！そんなこと考えてる場合じゃなかった！！とりあえず1
限終わってから朝ご飯食べるってことで！！」

自分に言い聞かせて走る、走る、走る。

周りなんて見ないで、ただ真っ直ぐに。

目指すは、大学だ。

2 (前書き)

主人公その2。

男 23歳 大学生

目覚めは、最悪だった。

●●●Side.Y●●●

昨日連れ込んだ女が襲いかかってきた。

スレンダーで小柄でわりと愛嬌のある顔だった・・・気がする。
名前は知らない。

その女が朝から襲いかかってきた。何が不満だったのだろうか。
それとも朝から盛っているのか。

色の白い女は好きだったが、ここまで青白いとちょっとその気にはなれないし。

なんか顔、変わってるし。

あんまり好みじゃなかったかも・・・。

乗気じゃないオレにお構いなしに凶悪な表情でのしかかってくる女の側頭部を、とりあえず近くにあった灰皿で殴りつけた。

「あ、しまった」

この灰皿高かったのに・・・。

やっと静かになった女に満足して着替える。今日は朝から必修の講義があったのを思い出した。

とりあえず興味があつて入った医学部だが医者になる気はさらさらないのでそこら辺はいい加減。
でもまあ、学費はとられてるし。出るに越したことはない。

「オレもう行くけど・・・」

さっさと出てってくれない？・・・と言おうとしてあれっきり動かない女に目をやった。

白目をむいているし、ちょっともうダメかもしれない。

「ゴミの日は明日だったか・・・」

朝からめんどくさい仕事が増えて、ため息が出た。

とりあえず、大学に行こう。

大学の階段を駆け上がった。

三段跳ばしなんて久しぶりにやった。1か月ぶりくらいだけど。

この大学、学費は高くせに変なところでケチってエスカレーターどころかエレベーターすらないんだから。

三段跳ばしだといつもなら一段多いはずなのに、今日はなぜかぴったりだった。おかげで勢いを殺さずに教室までダッシュで駆け込めた。運がいい。やっぱり日頃の行いって大事だよね!!

一番後ろの列を陣取っているはずの友人たちを探そうとして・・・教室に誰もいないことに気付いた。

ま、まさか・・・。

「うっそー教室変更!?!」

日頃の行い・・・悪かったのだろうか・・・。

教室の変更は確か掲示板にあったはず・・・1階の掲示板まで戻ろうとして、後ろに人がいたことに気付いた。

同じこの講義を受けている・・・確か田中君？中田君？そんな感じの名前だ。

「あれ？中田君も気づかなかったんだー今日はなんか教室変更っぽいよ」

同じ遅刻仲間がいるのはいいことだ・・・と、にんまり笑った。

この中田君を先に行かせて、教授がそっちに気を取られている隙に潜り込めばいいしね。

そうと決まればさっさと掲示板を見に行こう、と誘いをかけようとして・・・襲われた。

え！？何！？誰もいないからって朝からこんな場所で！？

わたしの魅力にクラっときたのか、いきなりすごい力で抱きついてきた中田君。

抱きつかれて不自由な体制を立て直すため、勢いよく体を回転させるように捻った。合気道の要領で田中君の腕をゆるませて・・・

とりあえず手近にあったパイプ椅子を掴んで振り回し、殴りつけた。

鳩尾あたりを狙ったけど、ちょっと手元が狂って、その・・・口では言えない部分に当たってしまった。

男の人にとってはアレだろうけど、自業自得だし！

「いきなり抱きつくなんて！ やっぱり物事には順序があると思うの
！」

フラれてショックに落ち込む中田君を見るのも忍びなかったし、
なんとなく変なところを殴っちゃった気まずさもあって、そのまま
教室から駆け出した。

あ、パイプ椅子持ったままだった。

誰かに見つかったら怒られるかしら？

4 (前書き)

さてようやくの、ふたりの出会い。

《呼吸をとめていたはずなのに、ソレは起き上がった。

そして、隣にいた人間に　　がぶり、と噛み付いた。

隣にいた人間は首を噛みちぎられた。

血があたりに飛び散った。止まらない止まらない止まらない。

赤く染まった身体をびくりびくりと痙攣させ、やがて、動かなくなった。

ソレは、動かなくなったモノを食った。

ようやく、周囲に悲鳴が広がった。さざ波のように広く広く遠くまで。

しかし、もう逃げられない。

死んでいるはずなのに、動くソレらは、隣にいる人間に、喰いついた。》

●●●Side.Y●●●

今日はハロウィンだったのか？

ハロウィンという行事は日本にココまで浸透していたのか・・・。

朝っぱらからサラリーマンが血糊付けて出勤するほどリベラルな国になっていたとは思わなかった。

会社で仮装パーティでもあるのだろうが、そんなのは終業後にでも準備すればいいのに。

でもとりあえずひとつ言うと、手を前に伸ばして「あ”あ”あゝ

「アア」とか通行人^{オレ}にまで呻いてみせるのはいくらなんでも演技過剰だ。

うまく仮装できたのを自慢したいのかもしれないが、朝からそれに付き合えるほどテンションが高くない。

悪いけれどここはスルーの方向で。

なのにそのゾンビな企業戦士は調子にのったのか興がのったのか二日酔いでよろめいたのかオレにしがみついてきた。

今朝は朝から良く襲われる日だ・・・しかも男に襲われても嬉しくもなんともない。

しかもふざけて噛み付こうとしてきた。

とりあえず思わず本気で殴ってしまったら、たぶんオモチャなんだろうけど簡単に鼻がもげた。

さらにうんざりした気分になりながら、崩れ落ちたサラリーマンを後にする。

とりあえず、講義はもう始まっている時間なのだ。

酔っ払いでお調子者のサラリーマンにかまっている時間はない。

リアリティ追求するのはかまわないが、なんかグロいし女受けも
しない。

アレじゃ、モテないだろうな。

★
★
★
★
★

うちの大学は良く言えば由緒がある、正直に言えばボロイ。
築ウン十年の貫禄はあった。

染みと罅だらけのいかにも戦前から建っています的な学舎には味
わいがあったし、仏教大学でもないのにキャンパスのど真ん中に寺
のような講堂と、誰のかよくわからない墓があるところになんとも

言えない趣を感じた。

しかし、ここまで荒廃した雰囲気はなかったような気がする。

講義が始まっている時間帯とはいえ、いつもはそれなりに賑わいを見せるキャンパスに人気がない。

しかもなんだか薄汚れている。窓ガラスは割れてるし、広場にはボロ切れやらペンキの跡やらが散乱している。暴動でもあったのだろうか。それにしちゃ、警察もないし。

とりあえず、教室に顔を出して休講かどうかだけ確かめよう。

そう考えてとりあえず講義があるはずの教室に向かう。

階段の真下に行き倒れっぽい学生が、なぜか背中に足あとをつけて転がっていた。

ちょうど・・・階段を駆け上がったとした誰かが、片足に瞬間的に全体重をかけて踏みつけました、みたいな足あとだ。

まあ、よっぽど急いでいたか、破滅的なほど鈍いのでなければ気付かないで踏みつけることはないだろうし。

おそらく痴話喧嘩か何かだろう。足あとの大きさからみて、相手は女だろうし。

痴話喧嘩にはかかわらないに限る、ここもスルーさせてもらおう。

学生を避けて、階段を上る。

階段を登り切ったところで、ちょっとスゴイものを見てしまった。

遠心力をうまく利用し、パイプ椅子のパイプの——しかも
Lの字になっている部分で気持ちよく誰かの頭部を殴り飛ばしてい
る女。

プロレスのように椅子の平たい部分でなく、力が集中しやすい面積の狭い部分でためらいなく相手の弱点を狙った。

横薙ぎに近い無理のないフォーム。

殴った後もバランスを崩すことなく力を綺麗に受け流していると、ころに熟練の技を感じる。

朝から匠の技を目にすることができるとは・・・。

感心しながら観察を続けると、くるりと振り返った女と目が合った。

5 (前書き)

若干遅れましたが、ようやく同じ時間軸。

モテ期到来！？

今日は本当によくアタックされる。

一度言ってみたかったセリフをやつと言える！

「モテる女って辛いわ」

誰も聞いてくれないから独り言になっちゃったけど。

●●●Side●●●A●●●

持ってきたままのパイプ椅子がこんなに役に立つとは・・・。

今日は本当にモテる。今まで合コンでも引き立て役にしかかなれなかったのが嘘のようにモテる。

今はわたしの時代なんだ。

もう抑えきれないフェロモンの何かを振りまいてるに違いない。

だって、さっきから会う人会う人老若男女、みんなわたしに襲いかかってくるんだもの!!

「よいしょ、っと!」

おかげでパイプ椅子の扱いのコツがだいぶ掴めてきた。
今では一撃必殺。

乙女の柔肌にむやみに触れさせるわけにはいかないんですからね!

「ひいっ・・・だ、だれか・・・たすけ・・・!!」

廊下の先に、尻餅をついたままずりずりと後ずさりしている人が見えた。

茶髪でピアスをじゃらじゃら付けている、今風の軽そうなお兄さんだ。

どうやら、彼も誰かに襲われているらしい。

相手は・・・後ろ姿しか見えないけど白髪混じりなところから見てかなり年配の・・・ご老人。

うーん、わたしのモテ期かと思ったのだけど、実はみんなの発情期だったのかもしれない。

ヒトの恋路は邪魔しちゃいけないし、とにかく掲示板を確認して遅刻でもいいから講義に出席しなきゃ！

わたしは男同士の恋愛にも理解があるしね。年の差恋愛もありだと思っし。

と、別のルートから1階に降りようとして・・・ふっと気付いた。

廊下の先にある光景を、もう一度見つめる。

ふらふらと青年に手を伸ばす老人。

恐怖に顔を引き攣らせる青年。

涙でぐしゃぐしゃになりながら、それでも周りを必死に見まわして・・・わたしに気づいたらしい。

「た、助けてくれ!!」

わたしは――駆け寄って、彼に襲いかかろうとしている老人の頭に、力いっぱいパイプ椅子を叩きつけた。

いい感じに決まった。

気分はホームラン。

わたしに縋りつこうとする青年を避けながらたった今殴り倒した老人の顔を覗き込む。

ちょっと頭部がへこんでいる気がしなくてもいいけど・・・

「やっぱり藤堂先生！！ダメじゃないですかこんなところで！！」

1限の講師の藤堂先生、この様子だと最低30分は起き上がらないだろう。

・・・一生起き上がれそうもない気もするけど。

授業開始から30分以内に講師が来なければ、自然休講になる！
遅刻もなかったことになる！

顔を見られないように殴ったし、殴りつける理由もあった！
今は9・・・16だから・・・あと14分！

よし完璧。

「えーと先生、後で医務室の人に声をかけときますね？」

だからあと14分、寝ていてくださいね☆

若干棒読みな気がしないでもないけれど、まあそこは愛嬌だ。

さて、目的地は掲示板前から食堂に変更だ。だって朝ごはんがまだなんだから。

さっぱりした気分で、くると向きを変えると、こっちを見つめる瞳とぶつかった。

6 (前書き)

出会いにもいろいろあります。
さて、この出会いは・・・？

お互いになんとか顔に見覚えがあった。

でもそれだけ。

名前も、学部も、知らなかった。知る必要もなかった、どうでもよかった。

もしも出会う、という行為が「お互いをしっかり認識し合う」というものならば

わたしは今日、初めて彼に出会った。

もしも出会う、という行為が「お互いの名を名乗り合う」というものならば

僕は今日、初めて彼女に出会った。

出会いは運命なんかじゃない わたしは

僕は

《運命》に出会ったんだ。

●●●Side.Y●●●

見事なフルスイングを見せた女は、表情に考えていることがすべて浮かんでいた。

「あれ？見られてた？ヤバいかな？」

「とういかこの人どっかで見たような・・・」

「とりあえず無罪を主張しよう！」

おそらくこんな流れだと思う。

「きゃあ！藤堂先生！！大丈夫ですかー！？」

ものすごい勢いでパイプ椅子を真後ろに投げ捨てた後、これ以上ない棒読みで、頭部を変形させた・・・というより目玉も半分飛び出ているんじゃないか、コレ・・・老人に声をかける女。

無理があると思う。

でも、まあ、そこはどうでもいいし。

「これ本当に藤堂先生？人相変わってたからわからなかった」

だって顔、ひしゃげてるし。
目玉、飛び出しそうだし。
もともと、顔に興味ないし。

「えーと、いきなり倒れたんです！そう！バツタリと！ドツサリと
！」

とりあえず、彼女は殴ったことをなかったことにしようとしているのはわかった。

「顔、へこんでるね」

「うっ」

「あんなところに、パイプ椅子があるね」

「ううっ」

「さっき、キメてたよね」

「うううっ」

「こう、勢いよくキレイなフォームでガッコーンと」

「うう・・・う？」

「うっかり見惚れちゃったよ・・・完璧な技だった・・・」

「・・・う？」

「あそこまでパイプ椅子を見事に使いこなすひとはなかなかいないよね」

「あの・・・えーと、あの。もしかして褒めてくれてます？」

「もちろんだよ。名前を聞いてもいいかな？僕は山下優輝やましたゆうきっていうんだけど」

藤堂先生を知っているみたいだし、今日あるはずだった講義にいつも出席していたんだと思う。自信はないけど。

半年同じ講義に出ていてなんとなく互いが分からないって・・・と自分のことながら苦笑がもれる。

「はあ、どうもご丁寧に。相沢杏奈あいざわあんなです」

未だ「？」を頭上に浮かべそうな彼女・・・相沢杏奈と僕は、こうして出会ったのだ。

どうでもいいけどもう限界。

お腹がすいた。

死にそう。

●●Side Anna●●

あれ？見られてた？ヤバいかな？

先生を止めるためとはいえ、さすがにパイプ椅子で殴りつけるところを見られるのはちよつとまずい。

だってわたしはか弱い女の子なのに！

パイプ椅子なんて重いものを軽々と振り回しているって噂がたつたら・・・!!

いや噂じゃなくて真実なんだけど、そこはそこ！

女の子は箸しか持ったことがないってくらいがいいのよ！

なんとか口止めしなきゃ……！！

「というかこの人どつかで見たような……」

うーん、どこだったかしら。うーんうーんダメだ、お腹が減って頭が回らない。

とりあえず無罪を主張しよう！

さっきから無言だし、もしかしたら決定的瞬間は見てないかもしれないし！！

そうだったら・・・とりやつ！

後ろ手でできる限り遠くに証拠（パイプ椅子）隠滅！

あとは自然な流れで・・・

「きゃあ！藤堂先生！！大丈夫ですかー！？」

我ながら完璧な演技！

いかにも心優しい女子大生って感じが出ていたと思うわ！！

なのに、そのアカデミー賞ものの演技を軽くスルーして誘導尋問を始めるどこかで見たような顔の人。

誘導尋問に引っ掛かりそうになって・・・なぜか褒められた。

褒められたのだ、最近の女子大生はパイプ椅子を振り回しても問題ないのだろう。

それともたくましい女性が流行りなのだろうか。

なんだかホッとしたら、もっとお腹が減った。

「あのーじゃあ自己紹介も終わったことですし、わたしはこれで」

とにかくお腹がすいているのだ。もうそろそろ限界が近い。

限界が来たら目の前にあるものに噛みついてしまいそうだ。

「ん？なんか用があるの？藤堂先生の講義なくなったみたいだから、今は空き時間だね？」

・・・なんでわたしのコマ割知ってるんだろう・・・はっ！

もしかコレが噂のストーカー！？きゃー！！

だから見覚えあったのかも！！しょっちゅう周りをうろついているに違いないわ！！

「ストーカーとかじゃないからね？オレもこの時間に藤堂先生の講義に出てるから知っているだけだからね？」

——藤堂先生の講義、なんとって受講者十人だし。

ううう、勘違い・・・ちょっとぎんね・・・いや恥ずかしい。

道理で見覚えがあるはずだね・・・。というか気付かなかったわたしがおかしいのか。

いや違う！お腹が減っているのがすべでの元凶よ！！

ご飯ご飯ご飯！！学食に早く行かなくちゃ！！

「というわけで、わたしは学食に行くわ！！」

「『というわけ』がどういうわけかなんとかなくわかつちゃう自分が怖いけど、学食行くのならオレも行くよ。朝抜いてきたからちょうどいい」

「もう何でもいいから早く行きましょ！」

今にも駆け出しそうなたしと、なんでか一緒に付いてくるとい
う山下優輝を止めたのは・・・

存在すら忘れていたじゃらじゃらピアスの襲われ男だった。

7 (後書き)

ストックはここまで。

あとは今月中もう1話なんとかがんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6151i/>

それはある朝突然に

2010年10月8日22時28分発行